

# 平賀源内

——風狂の文人覚え書——

中川徳之助

嗟非常人 好非常事

行是非常 何非常死

(墓碑銘)

はじめに

さまざまの人、さまざまの生き方、はめそしるのに、そがしいの

が世の習である。あるいは山師と呼ばれ、あるいは経世の才むなし  
く世に宥れられなかった不遇の人と言われる平賀源内も、世の飄  
の波に漂う人である。源内、名は国倫、源内は通称、字は土發、号  
は鳩溪、讃岐の人、平賀家位牌、過去帳、自性院内の墓碑の記載に  
従えば、享保十三年（一七三二）生、安永八年（一七七九）没、五  
十二年の生涯。その生涯には不明の点が多い。

本稿は、平賀源内について「風狂」の文人としての面影を尋ねようとするものである。

「風狂」という語は、しばしば用いられるにもかかわらず、意味の曖昧な語である。若干の辞書を檢して、依るところを知らない。したがって、観念的に意味規定を急ぐよりも、個々の文人の行歴を尋ねて帰納的に「風狂」の語の意味を明らかにすることが望ましい。

ただ、文人の行歴の尋檢を放任な作業におわらしめることをおそれ、かつて、「風狂」の文人について恣意性、潔癖性、内向性の三性格と反抗の意識・孤高の意識・自虐の意識の三意識の具有を指定し、「風狂」の語の概念に一応の目安を設けた。一応の目安であるから、將來、修正するにやぶさかでない。

あるいは問われようか。某の辞書にあるように「風狂」が「風雅ニ徴シタコト」であるならば、「徹」はこの純なるさま、世俗に對する反抗の意識の介在さえ許さぬのではないかと。まさしくそうである。「風狂」の文人には大別して二の型がある。一はおのずから風狂なる文人、二はみずから風狂にする文人である。三意識の指定は後者の型の文人についてであり、源内も後者の型に属する。

平賀源内は文人として特異であり、文学活動もまた特異な意味を持つ。その特異さを理解するために、源内の生涯を通じて見られ、彼の運命を決したとも思われる二つの特徴点についてまず考え、ついで三意識に即してその「風狂」性を考えることにする。

## 1 二の特徴点

### a 知才

源内を評して「才智衆に超え、且博識也。」（江戸作者部類・戯

作者考補遺）「為人聰敏奇傑。」（事実文編四四）の類の言は多く、その知才のほどを示す話も多い。

(1) 本草の学は源内の得意とするところである。幼にして天狗小僧と異名され、長じて高松藩の薬苑擲足輕に取り立てられ、初度の長崎遊学の時には唐来薬種の真偽を弁別して唐人を驚かし、長崎奉行は医師・通官に命じ源内について本草を学ばしめた（平賀実記）。

高松藩においては、のちに医術修行を命ぜられ薬坊主格に任用された（松平家譜）。藩命により藩内の薬草や鳥獸貝介土石の奇なるものを採取（淨貞五百介因序・物類品隨）、藩命によって和漢の鳥獸草木魚介貝金石類を集め、形象を写して和漢蘭名を注したとも言う（江戸作者部類・戯作者考補遺・実記）。物類品隨巻六に「人參栽培法」「甘蔗培養并製造法」が記されており、人參の栽培、砂糖の製造に成功した（江戸作者部類・戯作者考補遺・実記・事実文編一）

— 実記・事実文編の砂糖製造に関する記事には不審の点があるが今は措く。当時の高松藩主松平頼恭は殖産興業に力を尽し（高松市史三二一頁）、この藩主に重用されて源内の本草の知識は深められた。江戸に移っては田村元雄に師事（奴師勞之・浮世絵類考）、物産会を催し（物類品隨・武江年表）、江戸の医師をして「とかく本草におきては平賀程なる者はなし。」と敬せしめた（実記）。武江年表明和年間記事に「物産田村元雄平賀鳩溪後藤梨春」とあり、卯花園漫録にも同様の言がある。本草関係の著述に「会聚譜」（宝曆七・八・九）「紀州物産志」（宝曆十二）「物類品隨」（宝曆十三）「番椒譜」「番椒図譜」がある。

(2) 源内の採鉱事業については平賀源内全集下巻付章「源内先生のことども」に詳しい。秩父での採鉱には失敗したが付帯工事である

荒川通船工事には成功。炭焼事業も営む。宝暦十一年には幕命によつて芒硝を製す。

(3) 陶器工夫書(明和八)と呼ばれる一文は製陶についての源内の関心を示す。源内焼を製作。備後の溝川某に製陶法を教えたと言う。

(4) 火洗布(明和元)源内櫛——菅原櫛(安永五)金唐革を製す。

(5) 理化学の面では、磁針器(宝暦五)平線儀(宝暦十三)寒熱昇降器(明和五)エレキテル(安永五——岡本公平氏説)などを製す。マアスカーと云う蚊採器(入田整三氏・平賀源内と科学)もこの類か。オランダの器械類にヒントを得て製作したものもある。

(6) 源内全集下巻図版に源内筆西洋婦人図があり、洋面の拙法をわが国ではじめて試みたものと註す。和蘭通類(司馬江漢)西洋画談(高森鏡好)に源内の言として銅版に刻する術を草創すと記しているが年次に疑問がある。

(7) 戯作に、木に併のなる弁(宝暦十一)根無草・風流志道軒伝(宝暦十三)瘰癧陰逸伝(明和五)根無草後編(明和六)放屁論・里のをだまき評(安永三)天狗鬮籠鑑定縁起(安永五)放屁論後編(安永六)飛だ噂の評・菩提樹の弁(安永七)蛇蝎青大通・力婦伝・太平楽巻物・(飛花落葉)など、院本に、袖靈矢口渡・源氏大草紙(明和七)弓勢智鳥漆(明和八)嫩榕葉相生源氏(安永二)前

太平記古跡鑑(安永三)忠臣伊呂波夷記(安永四)荒御霊新田神徳(安永八)靈験宮戸川・奥生源氏金王桜がある。特異な作風は「平賀ぶり」と呼ばれ、「当時は国字稗説の未だ流行せざりしかば此作者又淨瑠璃の新作をも一時に都下を噪したり。もし文化まで死なずもあらば必よみ本にも新奇を出して楮の価を貴くすべし。」(江

戸作者部類)「根無草は平賀源内作なり。よみ本の体も其頃より一変したるとおぼゆ。」(芋野著談)「菅根から此方に何やらのなきこのかた狂文戯作の弘まりしは此風采子に止めたり。」(飛花落葉跋)とある。徳和歌後万載集に狂歌若干。また首巻(明和二)を製す。

以上の諸事例は源内の知才を示している。ここに注意されるのは平賀夷記に見られる、つぎのような記載である。

(1) 長崎の儒者渡辺忠藏の源内評。唐来薬種を検する源内を「これ全く薬物をせぐり出し己が功にはこらんとする利欲の爲なり。愛すべき人物にあらず。」と評し、また、「学問はともかくも誠に奇才の人物なり。」と評す。

(2) 徂徠派の儒者三浦瓶山の源内評。「彼が生質中實奥の経学者にあらず。如何といふに第一才の秀たるに任せて人人に取入る事妙也。其上身を立る事を第一として実儀に薄し。乍去絶交すべき人もあらず。」と。

(3) 井上金峨の源内評。「源内が来りしは全く道の爲にあらず。我才を量らんとすの故成べし。」と。

(4) 夷記評言。「源内は誠に学問の邪慮をなせし当世俗学の元祖なり。(中略)。惜ひかな。身を立るに急に用は邪道の初也といふ如く源内が秀才を以て実学に入るならば敵するもの不可有。悲むべきなり。」と。

前三者の評をふまえて言ひ夷記評言の「実学」は「実用の学」の意にあらずして「篤実の学」の意であろう。それにしても、「俗学の元祖」「源内が邪智」(同評言)とは他を評して酷に過ぎる。

夷記の記事の信憑度についての詳論は略するが、序跋を見てもこの

書が儒教的な教訓意圖を藏して書かれたものであることは明らかで、その故の記事の偏向も認められる。しかし、下世話に「火の無い處に煙は立たぬ。」のたとえ、悪意ある批評にしても、それを引き出すものが源内自身にまったく存しなかつたとは言えない。温知叢書本平賀史記の獨山人發書にも「史學はとても出来まじ。本章學は可惜こと也。」とある。

「味噌の味噌臭きと學者の學者臭きはさんさんの者なり。」とは源内が好んで口にしたことば（一話一言卷四五）、風流志道軒侯、放屁論にも同種の立言があり、放屁論後編には「吾を説斗を學問と思ひ紙上の空論を以て格物窮理と思ふより間違も出来るなり。」とある。「讀書不事章句。」（墓碑銘）の譯もかかわるところがある。これらの言は、理論よりも応用を、抽象的思考よりも具体的実践を重んずる性格が源内の知才の基根に存することを示している。彼の知才の發揮された領野がこれを証する。源内の知才の基根に存するこの性格を、熟しないことばだが、現実的性格と呼ぼうと思ふ。奇才、知に流れて篤実の風を施したとする史記の筆者は、源内の現実的性格をいまだ捕え得ていないのである。

### b 現実的性格

「源内髯歳より大志あり。」と言ふ（江戸作者部類、戯作者考補遺）。史記には、家督を譲ることを決意した源内の心懷を敘して「藥苑を預りて光陰を送るといへども我が高名を揚る事能はず。人の下に附て腰を屈せん事淵明が恥し所也。志を立ん者は下に屈すとも將軍の御膝元にて功を天下に顯さば不朽の大功なるべし。」と記し、江戸に下る途次の富士登山のことを敘して「古に云る如く高名

の下に居らずんば志は立がたと云。殊に地理天文を考ふるに武州の分野に當て青雲の星色あり。今青雲に登りて高名を立給ひしは田沼主殿頭殿也。此人へ取り入て志を立てしと初て江戸へ出て主殿頭殿へ取入らんといふ心魂起りしは此時也とかや。」と記している。奴師勞之に「江戸に出て学校を建んと思ひて」とあるが、江戸に下るに當つて源内の胸中、功名を求め志の存したことであり。源内が浪人となることを欲した理由については江戸作者部類に「其身は小吏の子なるを以て既に容用せらるると雖同僚の爲に侮慢せらるる事多かるのみならず其君寵に過るを妬む者も在しかば久しき後心もとなく思ふをもて（下略）。」と記しているが、小藩を去つて大樹に依らんとする心を見て誤らないであらう。

源内の功名を求め心が具体的に如何なるものであつたか明らかでない。しかし、杉田玄伯が「丈夫処世當希國家。安能黙羅里哉。」（墓碑銘）と記していることばを裏づけるような源内の立言は多く見られる。

(1) 若其術ヲ尽シテ世上ニ多ク作バ猥ニ和國ノ財ヲ外國ヘ費シ取レザル一ノ助タルベシ。然バ力ヲ用テ是ヲ世ニ弘メタラン人ハ誠ニ永ク我國ノ富ヲ致ス人ナランカシ。（甘蔗培養并製造法）

(2) 蛮人かく淺はかなる工にて我邦の人を惑はす。若日本人拙にしてかかること奇なりとし妙なりとして費ひ極ばは新井先生の五事略に論じ玉ふごとく我邦の宝貨年を遂て減じなんこと嗚呼惜むべし。故に彼國より來れるもの悉く我邦にて製出してこれを防ぎなんと数年心を用れども力足らずして徒に過行ぬ。（寒熱昇降記）

(3) 陶器も日本製宜さへ御座候得ば自然と我國之物を重宝仕外國陶器に金銀を費し不申却而唐人阿蘭陀人共も調掃候様に相成候得ば永

代之御利益に御座候。(陶器工夫書)

書簡にも「是ハ日本之土ニ而唐阿蘭陀之金ヲ取候工夫ニ御座候。」(平賀權大夫宛)「是日本之土ヲ以唐阿蘭陀之金銀ヲ取候儀御利益之段申上候処云云。」(同上)とある。

(4) 今迄唐より参候品は日本にて見出唐渡相止候得ば大手柄と皆々申居候。(武州秩父郡中津川村産燻甘石説明書)

戯作にも同種の言が見られる。経世の志と語りべきである。志は心のゆくところ、こうした志向にも源内の現実的性格が滲み出る。

史記には源内の功利に執する世才を指彈する言が多い。これは源内の現実的性格を理解していないにも因るが、また、源内の功利を求める心が上述の志に純粹に凝集せられているや否やに疑いを存するからでもあらう。つぎにその功利への関心のほどを考える。

(1) 功への関心について。すでに触れた。その他、エレキテルを利  
用して三井家に接近せんと図る(史記)、エレキテルの実験、セイ  
リタイトによる治煉を利用して大名たちに接近(書簡・史記)、新  
奇な細工物の献上(江戸作者部類・史記)いずれも功を求める心に  
出たものと言ふ。田沼意次と交渉を有したことも確かで、意次が西  
洋器物の輸入を許した(安永元)のも源内の進言によると言ふ。

(2) 利への関心について。源内が自己の才を貨殖に用いたことにつ  
いては「或は伽羅の櫛をつくり或は金から革を作りてつねの産と  
す。」(一話一言)「(火洗布を)諸大名より求めんと乞ふもの教を  
知らず。源内は大に貨殖して云云。」(史記)などとある。当時、  
その消火作業が大名の負担であった幕府の藏を火洗布の袋で覆うこ  
とを進言して、「大平の御代、消火作業は家中の手足を丈夫にす  
る。また、焼けぬ袋を覆うは油断のもと。水の手の便利なる道具を

工夫されたい。」との町奉行の名答を得た(史記)。源内櫛の売  
出しに遊女を利用したとも言う(史記)。史記の言を信ぜずとする  
も、火洗布の隔火を売出したのは商才と云うに近い。戯作による貨  
殖も考えられる(天狗燻燻鑑定続起序・根無草後編序・南柯夢な  
ど)。事與文編四四にも源内の利を得る機敏さを示す話がある。他  
面、「君素無恒産。以之囊中賡空。」(菟樽銘)をはじめ、利に執  
しないことを示す話もある。「大勢の人間のしらざる事を持と産を  
破り祿を捨工夫を凝らし金銀を費し云云。」(救屣論後編)をはじ  
めその戯作に見られる香乏表白のことばも一概に戯作者流の常套表  
現とは言えまい。院本類が生活の手段となっていることを記した書  
簡もある。

功への関心は経世の志を遂げんとする欲求に出で、利への関心は  
理化学という学問——さらには理論より応用を重しとする彼の学問  
の性格の必要に出でたものとすれば、源内の功利を求める心を史記  
に難ずるところ、ただちに世才と見ることは非である。しかし、時  
として功利を求める心が奔逸し、源内の知才が世才につながる場合  
もその生涯には見られるように思ふ。「身を立る事を第一として其  
儀に薄し。」(三浦糺山)という源内評も、合理主義的な生き方に  
対する精神主義者のいわれなき非難とばかりは言ひ得ない。ここに  
も源内の現実的性格のほげしさを見得よう。

## Ⅱ 平賀源内の「風狂」性

江戸作者部類には源内の戯作を評して、  
抑風求子の奇才なることいへばさら也。其專問にせし所聞学物産

に過ぎざれ共狂簡斐然として章をなす辭あるをもてかかざる遊戯猥雑の小冊子さへ多く著はしたりければ其名一時に噪しかりき。

とある。「江戸後期の文学では趣向性のよるこぼれる傾向があり、「風来山人の奇才たる、絛足が見たらん。」（江戸作者部類）と言われる源内の才とその現典的性情とを以てすれば戯作活動はさしたる難事ではなかつたであらう。院本についても、「淨瑠璃は大坂より初まりて近松門左衛門の作多し。故に大坂言葉なり。夫を源内は江戸言葉としたる故にや甚珍しく笑において世俗源内の名を知る。」（春波様筆記）と評されている。源内は幼時夢中に作りし発句を蜀山人に示したりしているが（一話一言）、文学の素養がどの程度にあったものか、蜀山人は「源内未知詩文。至狂歌俳諧未見一首一句之佳也。況詩文乎。」（温知義善本平賀史記發書）と評し、源内は「詩歌は屍の如し。」（その不用意を以て得るをいふ——一話一言）と広言する。渡辺忠綱は源内の漢文を「文章は古文辞を学びしとききしに中古文辞にてはさらになし。四六の切抜文章なり。」（史記）と評したと言う。院本については「既に福内鬼外（源内）や近松門左衛門の作は淨瑠璃本にてもかな手爾於葉の正しき事伊勢物語源長にひとしく云云。」（南柯夢）と過賞する者あれば、袖笠矢口渡について「例の物類品階の余計いまだぬけず旧癖のおこりたるもおかし。」（奴師勞之）とあげ足を取る者もある。しかし、文学の素養云云は源内にとって、それはどの問題ではない。「すべて小説は筆を楯にて遣ふ体にて然るべし。」（一話一言）のごとき戯作論も述べ、袖笠矢口渡の大当り以後は脚本作者としての姿勢もとのつてゐるが、源内自身の意識においてはつねに「戯作はただ一時の戯」（江戸作者部類・戯作者小伝・浮世絵類考）にすぎなかつたのである。

#### a 反抗の意識

江戸作者部類の源内戯作評に「只文に臨み忌憚ざる事多かり。」とも「病によりて跌危を惹出すに至らずとも傍より是を見れば謹慎に疎き人に似たり。慢心昂上して自ら禁じ得ざりしなるべしと或る人云へり。」ともある。過眼録に「讀者の看にあつべき物にあらざれば」とあるのも同様の言であらう。その作に見る狂猥奇矯の表現よりも、そうした表現の由つて来るところが問題となる。平秩東作は「其紙袋のうらを見れば憤激（ヂレ）と自棄（ワザクレ）ないまぜの文章なり。」（飛花落葉跋）と評し、蜀山人は「皆不遇のあまりに鬱憤を吐し文なり。」（奴師勞之）と評す。「予が先師風来山人猶習青雲の梯を踏失て天竺浪人と成しより滔浪の水滲に漫漶の世の醉を醒し云云。」（風来六部集序）「先生もとより世に用ひられず。世をすつとのかはに引込しもその智の余れるなり。智余れば人恐をなす。恐れられれば用ひられず。嗚呼難かな。」（風来六部集跋）ともある。宝曆十一年、源内は高松藩職仕拜辞願を出して浪人となることを許されたが、その際他家への仕官御構という釘をさされ、田沼意次を背景として功名を成さんとする草が水迫に帰したため、その不平不満が戯作への道をひらいたとする説（江戸文学辞典）は、彼の戯作がこの年に始まることよりして妥當の説であらう。——拜辞願の提出は二月と言われ、許されたのは九月、木に餅の生弁は三月に書かれ、月は前後するところがある。しかし、補説すれば、宝曆十一年を生涯の前期とし、それ以前における野望の挫折がそれ以後の戯作活動を展開せしめたとするのは当らない。幅広

い知才の活動、功利を求め心のおねりはむしろ宝曆十一年以後に見られ（「二の特徴点」参照）、戯作活動と並行している。この現象をわたくしはかく解する。源内の知才と現実的の性格とは事業を求めて止まぬ。事業の成就是功利への関心を高める。そこに他家仕官御禮の一札があらためて桎梏として意識される。その憤懣が戯作に吐露される。宝曆十一年以後の源内の戯作活動はこの行為の反覆において解されよう。しかもなお活動を止め得なかつたところに源内の知才と現実的の性格の強靱さが知られる。世俗に対する反抗の意識が、一見、世俗と協調するかに思われる現実的の性格に萌す所以もここにであると考えられる。源内の戯作活動において、他家仕官御禮の桎梏を重視しなければ、それが宝曆十一年に始まることについて、

(1) 浪人となることよつて表現の自由を得た、(2) 彼を容れぬ時代社会と世を容れぬ彼の性格とのずれが、功を成すにつれてますます彼の意識を刺戟した、という二の理由が大きく取りあげられよう。

「憤激と自棄ないまぜの文章」から、ことさら反抗の意識を取り出す要もあるまい。風流志道軒伝もその一例となる。志道軒は奇行の人。金曾本には平秩東作の談として、

風来、志道軒伝を作りし時、志道軒を湯島の茶屋にむかへて、風来麻上下にて一書評あげしとぞ。是入門せし心なるべし。其中におかしかりしは、序の文に、ここに志道軒といへる大たわけ有と云る所にいたりて、さすがに其人に對していかごとや思ひけん、之は追て直しますといひしもおかしかりき。

とある。師と言ひ弟子と言ひ、いずれ尋常ではない。奇矯の世界に我也入るうとする姿勢にも反抗の意識がうかがわれる。

## 6 孤高の意識

我汝に教も世界の人情をしりたる上にて世を滑稽の間にまけよと教しに、汝物にふれて心動し故却て難儀なる事度度及べり。人の浮世にまじはることは只錢湯に入がごとし。錢し中へはいる事は其機を請ん為にあらす。けがれを以て機を落し掛湯をして出たる時我身はいつも清浄なり。（風流志道軒伝）

他を俗とし卑とするところに、反抗の意識は孤高の意識につながる。「鰻干魚は石葛鉢をめぐり鯨は大海をおよぐ。」（里のをだまき評）。めだかは他、鯨は我である。

理にくらき聖は燧より出る火は管となる故怪まず、えれきてるより出る火は飯綱幻術の様に心得、又は閨操手づま八形と一つ事に覚え、慰に呼んで見る旁も多き中に、天文曆教酸いも甘いも吞込んだ親玉をはじめ理に通達せるからは、問ふに骨ありて答ふるにはづみあり。人の分量智恵の程を知らざる人は僅の芸をいひ立に口過する浪人者や日待月待に召さるる雜劇の芸者同様に心得たるぞ苦苦し。（放屁論後編）

すぐれた知才を有しつゝ世に容れられぬ情願は、「理にくらき聖」に對して孤高を意識することにより和らぐ。ことに源内には「対諸侯則説以利困。対庶人則説以利身。」（慕經銘）と評される経世の志がある。孤高の意識はさらに深められざるを得ない。

我也此当世をしらざるにはあらねども万人の首より一人有眼の人を思ふて仮にも追従輕薄をいはざれば時にあはぬは持前なり。されども人と生れし氣加の爲回恩を報ぜん事を思ふて心を尽せば世人称して出師といふ。予戲て曰智恵ある者智恵なき者を讒には馬鹿といひたわけと嘆あほうといひべら坊といへども智恵なき者智

恵あるものを讒には其詞を用ることあたはず只山師山師と讒より外なし。(中略)。我は只及ばずながら日本の益をなさん事を思ふのみ。或は膏大諸侯の為に謀りし事ども國家の大益なきにしもあらざれども狡兎死して良狗恐られ高鳥尽て良弓残る。

(放屁論後編追加)

其大勢の人間の知らざる事を持へんと産を破り鞍を捨て工夫を凝らし金銀を費し工出せるもの此おれきてるのみにあらず是まで倭産になき産物を見出せるも亦少からず。世間の為に骨を折れば世上で山師と讒れども風捕る猫は爪をかくす。我よりおとなしく人物臭き面な奴に却って山師はいくらもあり。

(放屁論後編)

源内の経世の志を思うならば、その挫折よりする反抗の意識、孤高の意識は同情されるべきものがある。しかし、源内には、世間との対決感をとさらに激化し、孤高をとさらに自負する点があったであらうか。

「尙氣剛傲。」(嘉徳銘)とあるが、平賀源内は気骨ある人である。経世の志がそれを示している。十五才にして医師修業すべき壽命を受けた時、「去ながら医者長袖にして僧侶に等し。(中略)しかるに私儀は僧徒同然の長袖と相成候事誠に言甲斐なきやうにぞんずるなり。」と辞退、武士になりたき所存ありとして足輕に任用されたと言ふ話(史記)、白石姓の家督を襲うに譲り、みずからは先祖の豪将平賀源心を慕って平賀姓を名のつたという話も、源内の気骨を示している。松平実定譜によれば医師は彼の本業であったが、医師に対する反感は戲作を通じていぢるしい。

今時の医者といふは武士の子なれば情弱者百姓なれば疎懶者町人なれば商を為得ず職人なれば無器用者にて糊口を為兼るもの医者

にでもならふといふ。これを考てでも医者として(下略)。

(天狗鬪鬪鑑定縁起)

の類である。「でも医者」に対する反感も、世間に対する反抗の意識の一のあらわれに他ならぬが、表現に流れる気骨を感じる。

源内の孤高の意識は、「源内が源内たるゆゑん」(桃源笈書簡)

と言ひ自負の中核をなす知才に因ることは言うまでもないが、彼の気骨がその鋭さを加えているのを見る。

知才の高さが驕慢に流れ、気骨の鋭さが狷介に流るるは器量の狭さに他ならない。

源内は、その戯作に、

浪人の心易さは一簞のぶっかけ一瓢の小半酒傾の産なき代には主人といふ聲もなく知行といふ飯粒が足の裏にひっ付かず行き度所を駆けめぐり否な所は茶にして仕舞ふせめては一生我体を自由にするがまうけなり。(放屁論後編)

主人が欲けりや飯粒を二百石か三百石に負けてやれば何時でも出来ると思へば苦にもならず。(飛だ噺の評)

などと記している。嘉徳銘(杉田玄白)・先哲叢談続編にも源内のことを褒げける言がある。昂然たる矜持は気骨をうかがわせるに足るが、このような発想での不満の吐露は源内の執意につながる。

なお、前に、他家仕官御極の一札によって源内の浪人生活が束縛されたものであったことを述べたが、上の敘述はそうした束縛の存在を考へさせない。束縛の消滅を示す資料が無い以上、如上の言は源内の意識の裡でのみ可能であったと思わざるを得ない。好古類纂に「源内有用の才を以て有為の君主に遇はず、鬻然放逸一世を愚弄す。」とあるが、たとえ仕官を拘束するものが存しなかつたとして

も、源内が以って有為となす君主があり得たかどうか、狹量といふ点に關連してわたくしは疑問に思ふ。

蓋野茗談に、世間では「天より降下たる様にいへども、これを観れば人作」なることの明らかな雷斧・雷髓をめぐって源内と村上某と争つたことが記されている。事の仔細は明らかでないが、源内が雷斧・雷髓を天来の物と断じたのが争いの原因ではないか。某の骨を天狗の鬮體と断じ（天狗鬮體鑑定縁起）、某の樹を菩提樹と断ずる（菩提樹之弁）の例がある。真実を知らぬのではない。「我一人知た顔にけちを付けるもおとなげなし。」（菩提樹之弁）と記しているが、他を劣視する自負と狹量のあるまいとみられる。

「行状は任侠にして常に食客の多きを厭はず。」（戯作者考補遺）  
「其行事類游俠。食客常十数人。」（事実文編）ともある。奥記には一芸に名を得し者を食客とすとあり、これを誣するような晝簡（岩田三郎兵衛宛）もある。こうした食客の養い方にも源内の現実的性格が投影しており、また、烏丸光広が賢愚となく邸内に寄食せしめたと伝えられるに比べて、器量の規模の差を感じる。晩年、源内の傷害事件当時に、源内は親しき友といえども著述の稿本を見るを許さず、という巷談が流布し（江戸作者部類）、傷害の動機もここにあったと伝えられるのも、彼の狹量を示すものである。「君為人磊落不羈。」（墓碑銘）「磊落奇偉。誠一世之雄哉。」（事実文編）ともあるが、狹量はかならずしも磊落に抵触することとは思われない。

源内の器量を論じて冗長にすぎた嫌いがあるが、孤高の意識は氣鋭と狹量に激化する。

## C 自虐の意識

謙談は不朽の業御高懸須弥山よりも高きにはこりたる野をしろずしていろいろの物ごのみは學問のいたりなりけりと自ら吾身をかへり見て

むき過てあんに相違の借の皮名は千歳のかちんなる身を

（二話一言所収）

執筆の事情が明らかでないが、源内の内向性を考えるに見逃せぬ一文である。源内の戯作を通じて、その内向性を考えさせるようなことばは多くない。「せめては寸志の、国恩を報ずるといふもしくらくさし。其位にあらざれば其政を諫らず。身の程しらぬ大衆と己も知ては居るそふなれと（下略）。」（放屁論後編）の類の表現をはじめ、

住は都とて田舎もの心得違ひ、すまば都の人真中と思ひ立、四国も猿智惠鼻の先なる江戸も江戸と神田の真中に住けるが、近年かねをほしける斗て名人切れの折に生れ、滯溜るとんだたこの落たる如く、何かはしらず虚名高くむだの付合手間ついやし、（下略）。（冬籠の吟・戯言）

の類、また若干の狂歌の類に、わずかに内向性に近い心の動きが見られる。しかし、その心の動きも、平秩東作の言う「憤激」と「自棄」に近く、自己の胸臆にむかって内向する動きとは言いがたい。自嘲ではあり得ても自虐ではない。これは源内の現実的性格から必然的に導かれるところであろう。したがって、源内にあつては、反抗の意識にしても孤高の意識にしても外に向うはげしさはあつても内の疏さを蔽している。戯作は彼にとって一時の戯であつたが、そ

れを一時の戯れにおわらしめざるを得なかつた因由の一は、この彼の心の動きにもあつたのではないか。備後鞆ノ津の溝川某に製陶法を教えた時、地神・荒神と併せて自己を祀らしめたという生祠に関する口傳（備後史談・源内全集図版解説）も、源内の内向性について語るところがある。

おわりに

竹竿に似たはげしさは折れるに脆い。源内が投獄された事情については諸説あるが、狂疾におかされ門人を害したことによるとの説（江戸作者部類・戯作者考補遺・実記・一話一言など）を採る。源

内も自害せんとして果さず、傷から破傷風を病んで安永八年十二月十八日獄死。田沼意次が助命に尽力したとも、仮死薬を服用して脱獄、遠州に逃れて文化初年の頃まで生存したとの説（先哲叢談）もあるが信じがたい。「心地たがへるまへにかきて人にしめせし発句」とされる「乾坤の手をちぢめたる氷哉」（一話一言）には異常な生理がうかがわれる。「風狂」の一義に「気チガイ」とある。まさしくその意味でも「風狂」となったが、これは蛇足。内向性に欠けはしたが、恣意性・潔癖性を具備する平賀源内には「風狂」の文人の席を与えてよからう。